

中ザワヒデキ展

脳で視るアート

2012年12月8日－2013年2月17日

武蔵野市立吉祥寺美術館

中ザワヒデキ展
脳で視るアート

2012年12月8日（土） - 2013年2月17日（日）
武蔵野市立吉祥寺美術館

主催：武蔵野市立吉祥寺美術館
協力：ギャラリーセラー、府中市美術館

<関連イベント>

中ザワヒデキ音楽作品コンサート

ピアノ：高橋悠治

声：sei (from ju sei)、河野円、田中淳一郎

2012年12月8日（土）午後3時～4時

対談

「脳波ドローイング」の生まれた日」

中ザワヒデキ×神山亮子（府中市美術館学芸員）

2013年1月26日（土）午後2時～3時30分

「中ザワヒデキの美術」

中ザワヒデキ×石井香絵（早稲田大学博士課程）

2013年2月16日（土）午後2時～3時30分

作家による新作設置

2013年1月20日（日）、2月10日（日）午後2時～

ごあいさつ

中ザワヒデキといえば、美術の根本を問い新たな表現のかたちを提示し続ける現代美術家として、その名を知る人も多いでしょう。しかし、その作品の典型を即座に思い浮かべられる人はそう多くないのかもしれない。というよりも、中ザワといえばこれだというような、ひとつの典型をみいだすことが極めて困難というべきでしょうか。中ザワの芸術遍歴はその展開の目まぐるしさのあまり、ひとつの固定イメージが一般に浸透するひまもありません。であればこそ改めて作品を辿ってみれば、制作活動の多彩ぶりに改めて驚かされることでしょう。中ザワは医学部出身で眼科医局勤務経験ありという異色の経歴の持ち主でもあります。そこで培われた理系知識の発揮された〈バカCG〉や〈方法絵画〉、〈脳波ドローイング〉など、コンセプチュアルアートの世界で新たな手法を切り開いていくイメージが強くもありますが、油彩画やアクリル画など既存のジャンルにおいても、ジョークを利かせたカラフルでポップな作品を数多く制作しています。

本展覧会では、脳の知覚作用や視覚生理を切り口とした作品を中心にピックアップし、中ザワが追究する方法理論に裏打ちされた、独自の現代アートの世界を紹介します。鑑賞における視覚の意義を強く再認識させるその作品の多くは、観る者の視覚を刺激し、さらに作用を及ぼす脳の中で紐解かれて初めて完成されます。素通りを許さず、一目では解せず、多角的な見方を与えない、言ってしまうと一方的なこの作品ひとつひとつと対峙し、それらが持つ理論の読解に挑むことは、観ることの意味を今一度考える好機となるでしょう。

やや難解な印象のために、見ただけで気の遠くなる方もいらっしゃるかもしれませんが、試しにお付き合いください。中ザワの作品のみならず、近寄り難いと思われがちな現代アートに歩み寄るきっかけとなれば幸いです。

最後になりますが、本展覧会の開催にあたり、貴重なコレクションのご出品をご快諾いただきましたギャラリーセラー、府中市美術館、ならびに個人コレクターの皆様へ深く感謝いたしますとともに、多大なるご協力をいただきました関係者各位に心よりお礼申し上げます。

2012年12月

武蔵野市立吉祥寺美術館

05

謝辞

本展覧会の開催にあたり、貴重なコレクションのご出品をご快諾いただきました関係各機関、個人コレクターの皆様、またさまざまなご協力とご助言を賜りました関係者の皆様に、深く感謝いたします。（順不同・敬称略）

なお、ここにお名前を記すことのできなかつた多くの方々にお力添えをいただきました。あわせて、心よりお礼申し上げます。

ギャラリーセラー

府中市美術館

ジョナサン・ハーロウ

都築潤

松前公高

石井香絵

室井良輔

鈴木健一

脳で見るアート

中ザワヒデキ

「個人的には、〈シリョクヒョウ〉や〈セル〉などの医学的なものに特に惹かれており、これらを含めた構成をイメージしているところです」と書かれたメールをわれわれが受け取ったのは、2012年6月25日のことであった。われわれとは、私がお世話になっているギャラリーセラーと自分のことである。武蔵野市立吉祥寺美術館の学芸員、菅沼万里絵さんからのこの一通のメールから、私にとって初めてとなる公立美術館での個展の準備が始まった。

ギャラリーのディレクター氏曰く、「中ザワさんは〈方法〉とか〈バカCG〉とかからの見方が一般的だけれど、医学的という今回の切り口は新鮮で、成る程と感心した。そういえば〈脳波ドローイング〉とか赤青メガネの立体視（〈アナグリフの穴〉）とか、医学的といえる作品はいっぱいあるし、これは中ザワさんに対してもわかりやすく嬉しいアプローチだよ」。というわけで、美術館での最初のミーティング時には数ある私の作品シリーズのうち、どれをピックアップして展示しようかと、ワイワイがやがや論じ合った。

「作品より作品名のほうが重要である」という考え方も時に辞さない私としては、出品作選定よりもまず展覧会名を決めるべきでは、などと言いだし、たしかそのとき出たアイディアは自分がかつて眼科医だったこともふまえて「視覚生理からのアプローチ」というものだった。けれどもギャラリーのディレクター氏が「それだとオプティカルになりすぎるから脳という言葉も入れるといいのでは」と助言してくださり、結局決まらず保留となった。しかしそのとき私は直感で、囲碁の作

品（〈盤上布石絵画〉）も出品したいと突如言い出したのだった。

数日後、自分の作品を整理していて、なぜちっとも医学的でない囲碁の作品を自分があのとき言い出したのか、合点がいった。2007年に朝日新聞の週末別冊版「be」に連載したのだが、その連載タイトルが「脳で見るアート」、そこで取り上げたもののなかに囲碁のシリーズがあり、内容はまったくもって脳で見るアートそのものだったのだ。

そして菅沼さんはじめ美術館のかたがたも、たぶんこの名称を気に入ってくださったのでしょうか（そうだとよいのですが）、展覧会名は「脳で見るアート」となりました。お楽しみいただければ幸いです。

なお関連イベントのひとつ「中ザワヒデキ音楽作品コンサート」について。美術家である私が文章を書いたりこのように作曲したりすることをわかりにくいと思われる方もいらっしゃるが、本展覧会名に即していえばこれはいわば「脳で聴くミュージック」である。「脳で聴くミュージック」が、「脳で見るアート」の最良の解説（あるいはその逆）となっていれば、私にとっては成功だ。

素人の、素人による、素人のための中ザワヒデキ

菅沼 万里絵 武蔵野市立吉祥寺美術館学芸員

中ザワヒデキという人物の名を私が認識したのは随分昔のことで、中学生時代にまで遡るかもしれない。そしてこれまで何度もその名を耳にし、活字としても目にしてきた。だが、さてその人物がいったい何者で、何で飯を食っているのかという疑問はスルーして来た。長い事その存在を認識していながら、なぜそんな疑問が湧き、それを引きずってきたかということ、中ザワの活動領域が広すぎて、同一人物とは思ってもみなかったからだ。いや、まったく言い訳がましいことだが、実際問題として、彼は実にいろいろやりすぎている。日本の主要新聞、美術雑誌をめくり、展覧会情報にアンテナを張っておくという、美術に携わる人間の習慣を細々とでも続けていると、中ザワの話題は断続的に仕入れられるのであるが、これが一人中ザワの活動履歴であるのか、はたまた、似たような名前の業界人が入り乱れているのか、どちらかといえば私は後者の方だと信じ込んでいた。というより、そうでない可能性を検証するという作業を放置していたのである。もしもっと早くに前者の事実に気づいていたならば、このアーティストの引き出しの多さ、発想転換のエネルギーに驚愕したことだろう。

つまり裏を返せば、その仕事の一部だけ取り上げそれだけを眺めているうちは、感心こそすれども特に感動を覚えるわけではない。「私の創作活動は、誰もやらないから自分がやる、という義憤なんです*1」という中ザワの言う通り、なるほどその手法はユニークで、外から取り崩させぬ強固なコンセプトの構築にも抜かりない。しかしこれをこの先も続けていくのかと思うと途方に暮れ、

いつまでもつのかな、とさえ思わせるところがある。そして確かに長続きしない。終わってしまう。というか終わらせているのである。さっさと手前で見切りをつけて、次に手を付けたがるのである。つまりこのアーティストは、その切り替えの早さを前提に全体を眺めてみないと真のすごさがわからない逸材である。残念ながら当館の規模では、その全貌を披露することは叶わないが、ここで取り上げた8つのシリーズを眺めるだけでも、個展とは思われない多様性が見て取れるだろう。

さてその活動歴は、中ザワ自身の手によりすでに整理されており、美術史に刻まれる準備も万端である。それによれば、制作を本格的に始動するまでの時期を「プレ期」とし、それ以降今日までが4期に区切られている。

第1期は日本グラフィック展に入選した1983年に始まるアクリル画の時代で、眼科医局に勤めながら個展を開き、さらにその傍ら執筆も行い『近代美術史テキスト』（1989年、トムズボックス）を出版している。翌90年よりイラストレーターとしての第2期がスタート、コンピュータで作られたいわゆる「へたウマ」なイラストで、ギザギザの線を逆手に取った低解像度の作品を数多く生み出した。これが一世を風靡したあの「バカCG」である。ここまでの自由に満ちた遊びのある作風と決別し、美術家を名乗るようになったのが97年、第3期の始まりである。確固たる理論とコンセプトに則った「方法絵画」を展開し、本展にも登場する〈盤上布石絵画〉などを生んだ。〈灰色絵画〉や〈脳内混色絵画〉はその集大成的

な位置付けとなる代表作である。

この後間もなく「本格絵画」に取り組む第4期に突入、多面的な解釈を阻んでいたそれまでの作風から角が取れ、心成しか大らかさが出て来たようだ。〈脳波ドロージョウ〉や〈セル〉の制作はこの時期に当たる。もちろんこれらにも背景には揺るぎない理念があり、それを土台に完成に至ったものではあるのだが、少なくとも観る方の立場からすると、それまで必須だった解説書が不要になったという、一種の開放感がある。「方法絵画」にしても、あるひとつの見方を強制したいわけではなかったろうがしかし、そこには無視できない法則がきつと用意されている、という匂いがぶんぶんしていて、それを嗅ぎ取った鑑賞者も思わず身構え考えこんでしまう。いくら考えても、自分ひとりでは答えの出せないこともすぐに察しがつく。作品を読み解く手引き書がその場になければお手上げ、それでおしまいとなる。この相手を突き放す高飛車なオーラが、ここ数年の作品には見られなくなった。理詰めのコセプチュアルアートに辟易する私のような人間には喜ばしい傾向だ。

ところで作家自身が展覧会に寄せたことばの中でも触れているように*2、〈シリョクヒョウ〉や〈セル〉などの医学的なものに惹かれ、これを展示したいのだ、と私は申し入れた。これはこれで本当にそう思ったことだが、より正確な言い方をすれば、「〈シリョクヒョウ〉や〈セル〉に惹かれる」という心境でいたところ、「2つとも医学っぽい」という事実気付いた、というのが真相で、もともと同時に思いついたものではなかった。つまり医学的だから惹かれたわけではない。だがひとたびその方向で動き始めたら構想は一気に膨れ上がり、展示室に収まりきれないほどの作品が候補にあがった。それは出品内容につい

て、中ザワとギャラリーセラーからの積極的・具体的提案があったおかげであり、それによって、医学的な背景を持つシリーズがやはり多いことに私自身も改めて気付かされることとなった。

〈シリョクヒョウ〉と〈セル〉に私が惹かれた動機はまったく、感覚的の一言に尽きる。もともと絵画というジャンルに引き込まれるかたちで今の仕事にたどり着いた私は、板やカンヴァスをみれば食指が動く。そして中でもパッと目を引く色使いに心が躍るから、という本能的な理由に依っている。ただしそれだけのことならば、アクリル画時代にも本格絵画時代にも色彩豊かな作品は目白押しであるが、これらのシリーズに共通して言えることは、作品のインパクトの割にタイトルが味気ないことである。シリョクヒョウやセルというモチーフがそのまま…その辺のギャップについて引かかってしまった。一点一点の区別の仕方もまた、タイトルに色の名前をそのままくっつけるだけ。

特に〈セル〉の方は、シリーズ解説でも触れているように*3、使用した色の名を簡略化したうえで、使用した順番に淡々と羅列してある。それなりにたいそうな文字数を割いているのは、整然とした制作プロセスを重要視している証拠だろう。それを裏付けるように、カンヴァス裏面には色のフルネームとそれを塗布した日付までが丁寧に記録されている (p41 fig.2)。

このようにタイトルの付け方は本シリーズ一様で、まったくその掟を破ることはないが、色の塗り方や筆のタッチにはブレがあって、些か血の通った一面が垣間見られる。例えば《セル(ゴールド・ミスト・ピュア、3)》(図版27)は均一に塗り広げられた色面が美しく、その境界には洗練されたしなやかな線が生みだされている。一方、《セル(グリーン・ミスト・パーマメント、3)》(図版6)をはじめとするSMサイズの小品群は、

惜しみなく使われた絵具が不均質なマチエールをつくりだしており、そのゴタゴタした筆のタッチに「へたウマ」要素を見いだすことができる。

歴史法則主義の立場から中ザワは、20世紀美術の流れにはおよそ30年周期のサイクルが存在するという循環史観を提示しているが*4、デビュー30周年を迎える中ザワ個人の美術史はどう変遷していくのか。アクリル絵画期の豊かな色彩と表現性を取り戻しつつある近年の動向は、2度目のサイクルが巡りくる兆しではないだろうか。今後の展開が期待される。

一筋縄でいかないこのアーティストについて、私自身もなかなか理解できないできたし、いまだに理解に苦しむことは多い。そしてこれからも理解することはできないだろう。そんな私がなぜ中ザワの個展開催に踏み切ったか。それは、理解しなくとも鑑賞は可能だということ、身を以て知らしめたかったという点が大きい。中ザワも含め現代アートに関しては、「わからないからつまらない」「わからないのをバカにされているようで不快だ」などといったネガティブな見方が常につきまとう。どちらかといえば私も、現代アートに対して基本的には冷淡な方で、心から愛でることができない人種である。そうした人種の代表として、理解できない者なりの基準で作品を選んだので、中ザワに精通している方々には偏った印象を与えるかもしれないし、邪道だとお叱りを受けるかもしれない。そして個々のシリーズの解説文も、極力平易な言葉を選び噛み砕いて説明することを心がけたので、これまたご専門の方々には歯痒い思いをさせるのかもしれない。しかし解る人にしか解らない通好みのことばを連ねても何の解説にもならず、まったくの自己満足に過ぎない。まずハードルを下げて、それを越えてもらう事が肝要である。越えてみた結果、案の定嫌気が差すかも

しれないし、予想に反して好感が持てるかもしれない。作品に歩みよってみなければ始まらないだろう。賞賛するも批判するも、それからの話だ。食わず嫌いに終わるのが一番もったいない。コンセプチュアルアートに疎い素人の私が、あえてこの展覧会を担当することにも意味があると思うのである。

*1 Close-up 中ザワヒデキ (『月刊ギャラリー (292号)』株式会社ギャラリーステーション 2009年8月)

*2 本図録p7

*3 本図録p41

*4 榎木野衣×中ザワヒデキ緊急eメール交信 日本・前衛・美術 (六〇年代→〇〇年代編一序論) (『美術手帖 (811号)』美術出版社 2001年10月、還元主義から新表現主義へ 70年前後の〈転換〉から80年代前半の〈断絶〉まで『美術手帖 (866号)』美術出版社 2005年7月)

※なお、ここで詳細に述べる事のできなかった中ザワの全貌については、中ザワ研究の第一人者である石井香絵氏の論文『中ザワヒデキの美術』(トムズボックス、2008年7月)に詳しい。

凡例

- ・ 図版は制作年代順ではなく、展示構成に沿ってシリーズごとにまとめた。
- ・ 図版に付したキャプションは、出品番号、作品名、制作年、技法・材質、寸法、所蔵の順に記した。
- ・ 作品シリーズ解説は菅沼万里絵が担当した。
- ・ 中ザワヒデキ年譜は、室井良輔氏が制作したデータベースをもとにしており、極最近の事項については新たに加筆している。